

日本語学会第144回大会
口頭発表，ポスター発表，ワークショップ要旨

2012年6月16日（土），6月17日（日），東京外国語大学

The 144th Meeting of LSJ
Tokyo University of Foreign Studies, 16-17 June, 2012
Abstracts of oral presentations, poster presentations, and workshops

《口頭発表 Oral presentations》

On the distribution of possessive pronouns in modern Mongolian

Lina Bao, Hideki Maki, Megumi Hasebe

This paper examines the distribution and the properties of possessive pronouns in Modern Mongolian (Mongolian, hereafter), and discusses implications of the properties in the theory of grammar. We call the post nominal possessor pronominal element *possessive pronoun*. Based on the possessive pronouns data in Mongolian, we claim (1) that there is a condition on genitive subject, which prohibits it from being semantically the possessee of the head noun, (2) that the underlying structure of the host NP, the genitive case marker, and the possessive pronoun is of the form [NP-Gen+PP (Possessive Pronoun)...N], and (3) that there is a condition on a doubly filled case position, which either moves a possessive pronoun to the head noun, or elides it.

A mystery with the *ceart* ‘correct’ construction in modern Ulster Irish

Hideki Maki, Dónall P. Ó Baoill

This paper addresses the mystery arising from the *ceart* ‘correct’ construction in modern Ulster Irish (Irish, hereafter), and investigates what the properties behind the mystery suggest for the theory of (Irish) syntax. It will be shown that the data on this construction suggest that the Chain Conditions override the Case Filter in Irish. That is, when the sentence is subject to the Chain Conditions and the Case Filter, the latter may be violated unless it violates the former. We therefore conclude, based on the properties of the *ceart* ‘correct’ construction in Irish, that part of the UG principles (such as the Case Filter) may be ignored given a proper set of explanatory reasons.

Double-*o* Constraint revisited

Fumikazu Niinuma, Shigeki Taguchi

The aim of this paper is to reconsider Hiraiwa's (2010) phase-based double-*o* Constraint in Japanese, as shown in (1):

- (1) Multiple identical occurrences of the structural accusative Case value cannot be morphophonologically realized within a single Spell-Out domain at Transfer.

What is important for our concern is 1) that the constraint is calculated based on a phase, and 2) that the morphophonological information of the accusative NPs must be considered. In this paper, we will argue that the two points mentioned above must be revised; more specifically, the constraint is applied to phrases, not phases, and the syntactic information of the accusative NPs is also taken into account.

対格言語と能格言語の共時的違いと通時的変化

菅野悟・北田伸一

本発表では、主題役割(θ -role)の素性継承(feature inheritance)という観点から、対格言語(accusative language)と能格言語(ergative language)の共時的違いと、これら2種類の言語間の双方向的な歴史的変化を説明する。本発表では、主題役割は v に導入され V へ素性継承されると仮定する。そして、どの主題役割が素性継承を受けるかの違いにより、この2種類の言語の違いが生じると主張する。

さらに、対格言語から能格言語への歴史的変化は受動文(passive)を通して、また、能格言語から対格言語へは反受動文(anti-passive)を通して行われる。このため、2種類の言語の双方向的な変化は、有標構文(marked construction)で観察される素性継承が意味的に無標化(semantically breaching)したために生じると主張する。

受動文における外項抑制／結合価減少は必須か？

野元裕樹

一般に受動文では動詞の外項が抑制され、結合価が1つ減少すると考えられている。本発表では、マレー語のdi-受動文の分析を通して、受動文に関与するのは結合価減少を可能にする意味合成法、制限(Chung & Ladusaw 2004)であり(Legate 2010)、実際の結合価減少は必須ではないと主張する。di-受動文の動作主句は前置詞oleh「によって」を含む場合と含まない場合がある。oleh動作主句は明らかに付加詞である。olehが生起しない場合、普通olehが随意的であるとされる。本発表では、分布、束縛、裸受動文との比較に基づき、olehなし動作主句は項であることを指摘する。これにより、受動文での結合価減少はolehがあれば起こるが、olehがない場合には起こらないと言える。この違いはdi-

が述語を飽和しない、制限を意味合成法に指定すると分析することで説明できる。非飽和の外項が関数適用により飽和されれば oleh なしの、存在閉鎖により飽和され、付加詞の動作主句が加えられれば oleh 有りの di-受動文となる。

等価的小節の分布について

浅田裕子

英語などの言語では、*consider* などの認識を表す動詞は叙述的小節 (predicational small clauses) と共起することは可能であっても、等価的小節 (equative small clauses) と共起することはできない (例: I consider [_{sc} John a genius]. /*I consider [_{sc} John Mr. Smith].)。多くの先行研究では、この事実の説明に際し、認識動詞は等価的小節を補部として選択しないという一般化を想定している (Den Dikken 2006, Heycock 1994 など)。本発表は、日本語における観察事実に基づき、この想定が記述的に妥当ではないことを示し、等価的小節の分布に関する新しい一般化を提案する。そしてこの提案が、小節を含む日本語の受身・可能・使役構文、及び英語の受身文など一連のデータを正しく捉えることを示す。

音象徴／類像的意味と統語構造のインターフェイス

大関洋平・飛島麻衣

本発表は、音象徴 (sound-symbolism) や類像性 (iconicity) と称される意味と、日本語の擬音/擬情語副詞 (mimetic adverbs) が付加する統語構造との間に潜む有機的なパラレリズムを明らかにすることを目的とする。まず、音象徴/類像性について、Hamano (1986) や Akita (2009) で提案されている語彙類像性階層 (Lexical Iconic Hierarchy) を確認する。次に、擬音/擬情語副詞の XP 付加位置に関して、Koizumi (1993) に基づき、分裂文・否定スコープ・線形順序などの経験的事実を示す。そして、理論的帰結として、Akita (2009) が複合述語を中心に論じている、音象徴と統語のマッピングに新たな視点を提供する。最後に、Kita (1997) が主張している「分析的次元 (analytic dimension)」と「感情・イメージ的次元 (affecto-imagistic dimension)」の2分法に基づく分析では不十分であり、統語構造に基づくより精緻な分析が必要であることを示唆する。

かき混ぜ文とゼロ目的語の談話機能における相補分布性

今村 怜・小泉 政利

本研究では、日本語の「かき混ぜ文」「ゼロ目的語」「話題標識」の相互関係を調べるために中心化理論による分析を行った。まず、すべてのパターン($0_{\text{ACC}SV}$ 、 $0_{\text{TOPIC}SV}$ 、 $S_{\text{NOM} proV}$ 、 $S_{\text{TOPIC} proV}$)で現行文の0が先行文とのつながりを示す傾向があるということが示された。これは、「かき混ぜ文」と「ゼロ目的語」のいずれも非動作主を文の中心に据える操作であるということを示唆する。そして、 $0_{\text{ACC}SV}$ と $S_{\text{NOM} proV}$ は後続文において相補分布性を示すという結果を観察した。すなわち、 $0_{\text{ACC}SV}$ に後続する文では文の中心が0の指示対象からSの指示対象へと移るのに対し、 $S_{\text{NOM} proV}$ に後続する文では0の指示対象を継続的に文の中心として据える傾向を観察した。しかし、この相補分布性は話題標識「は」が現れると消えてしまうという結果を観察した。すなわち、 $0_{\text{TOPIC}SV}$ と $S_{\text{TOPIC} proV}$ に後続する文では、現行発話のSと0のどちらから話題を受け継ぐ傾向が強いとも言えなかった。

韓国麗水市突山邑方言のアクセント

姜英淑

本発表では、韓国全羅南道 (Jeollanam-do) 麗水市 (Yeosu-si) 突山 (Dolsan) 邑方言の名詞のアクセント特徴について考察する。

名詞単独の音調、付属語付きの音調及び短文の中で実現される時の音調特徴を観察し、次の二つの型が対立を成していることが分かった。

α : 文節の最初の2音節が高く、且つその後は低く発音される。

β : 文節の次末音節が高く発音される。

麗水の他地域の方言を扱った先行研究では、上記の α 型と β 型以外に第1音節が高いアクセント型 ([○]○○…) も対立を成しており、3型アクセント体系と解釈されている (β の音調特徴も異なる)。これに対して、突山方言では第1音節が高い ([○]○○…) 音調型は、形は残っているものの弁別性がないものと解釈し、(β 型の音調特徴を含めて) 麗水方言の中でも地域差があると考え、2型アクセント体系であると結論付ける。

韓国語光陽方言のアクセント

孫在賢

本発表では、韓国全羅南道東南部に位置する光陽市（Gwangyang-si）のアクセントについて報告する。この方言は、慶尚道方言式3型アクセント地域と全羅道方言式3型アクセント地域として分けられるが、慶尚道方言で観察される3型アクセント体系を有する方言のなかでも、接続形と言切り形の区別のある方言が存在していること、また接続形と言切り形の区別を有する方言では、下降の遅れが起こったことがわかった。

「接続形と言切り形の区別」と「下降の遅れ」は、とくに江原道方言のN型アクセントにおいてよく観察される現象でもあり、韓国語のN型アクセントの成立過程をたどることにあたり、重要な手がかりになると考えられる。

韓国語方言における語彙アクセント消失とソウル方言音調パターンの成立 - ソウル・全州・光州方言の比較から -

李文淑

本発表では、弁別的な語彙アクセントを持たないとされるソウル方言、はっきりした語彙アクセントの対立はあるものの、語頭子音や母音の長短によるアクセントの固定化が見られる光州方言、両方言の間に位置すると思われる全州方言の三つの方言を比較することにより、ソウル方言に見られる単純化した音調パターンは、本来備わっていた弁別的語彙アクセントが消失することにより生じたことを示している。これら三つの方言を比較してみると、ソウル方言はもっとも条件が単純化しており、頭子音だけですべての音調パターンが予測可能である。全州方言は、頭子音がアクセントを決める大きい条件にはなっているものの、語によって本来のアクセントが優先されることがある。光州方言では、頭子音の条件もアクセントに関与しているが、母音の長短と語本来のアクセントが優先される。これらの三つの方言を見る限り、現在のソウル方言は、(無アクセントの状態から頭子音を条件として音調の対立が生じてきたというよりも)、本来備わっていた弁別的語彙アクセントが失われ、頭子音の種類という音声的要因に条件が単純化することによって成立したと推測される。少なくとも朝鮮半島西部にある全州方言と光州方言は、この傾向を示しており、この仮説の傍証となる。

終助詞の感受性に関する個人差：対人調整能力と性別の影響

木山幸子・玉岡賀津雄・リヌス フェアドンスコット

終助詞「よ/ね」の適切性判断の聴覚提示実験を行い、これに「自閉症スペクトラム指数 (AQ)」で想定した対人調整能力と性差が影響するか否かを検討した。実験刺激は、先行話者に後行話者が答える2つのターンから成る対話であった。各対話には、後行発話の末尾に「よ」を付けたものと「ね」を付けたものの2つを用意した。自分の情報を提示するタイプと相手の情報にコメントするタイプの2種類があり、前者は「ね」が適切で「よ」が不適切、後者は「よ」が適切で「ね」が不適切と想定した。操作チェックを経て行った実験の結果、「ね」が「よ」より有意に速く、適切さの判断が不適切さの判断より有意に速かった。この結果には、一貫して性差が有意に影響した。また不適切さの判断に、AQの一領域である「注意の切り替え」の有意な影響がみられた。終助詞の感受性は女性のほうが強いこと、日常生活で注意の切り替えがスムーズにできる能力と関わることを示唆される。

マレーシア語の談話小辞 *kan* の機能分化：日本語の文末形式との対比を通じて

勝田順子・堀江薫

近年、東南アジア言語の談話構造や談話標識に関する機能主義的、相互行為分析的な観点からの研究が増えてきているが、マレーシア語のそれらについては体系的な研究はあまり行われてきていない。本発表では、マレーシア語のインフォーマルな会話場面にのみ出現し、発話者の相互行為的な態度を表す小辞 *kan* の談話機能及び機能分化の様相を、日本語の文末形式との対比を通じて明らかにすることを目的とする。*kan* は (I) 文末における「付加疑問」の機能と、(II) 文中における「文の響きの緩和」という聞き手目当ての機能、の2つを有する。本発表ではこの2つの機能への分化が起こったプロセスを、日本語の文末形式「じゃない」が「付加疑問」を獲得したプロセスとの平行性を一部援用しつつ論じ、(I) から (II) へと機能が分化したという仮説を提示する。

LFにおける格と虚辞 *there* の統語機能について

平崎永里子

格 (Case) は特定の文法関係を持つ語彙に対して与えられる形態的な素性であると考えられており、極小主義理論では、格素性を C-I system にとって [-interpretable] な形式素性の一つとして扱っている。本論の目的は、従来の生成文法における格の理論的扱いの経験的不備を指摘し、その不備を補った格の体系が理論的にも妥当であると示す事である。具体的には、格が意味解釈にも貢献する事を踏まえ、従来の形態的格素性と独立に、Filmore

(1975)等で提案されたような意味概念に関する格素性が存在すると主張する。本主張により、従来の理論では捉え難い、英語の ECM 構文において、ECM 主語が主節の動詞から対格を付与されるために必要とする顕在的移動を虚辞 *there* が行くと非文になるという事実 (Koizumi 1993, Ura 1993) を適切に捉える事を可能となる。更に、本論が提案する格理論によって、*allege* タイプの動詞や *assure* を含む二重目的語 ECM 構文等、従来の格理論にとって問題となる構文も統一的に説明可能である事も示す。

韓国語/朝鮮語「属格主語節」の統語構造
—韻律的特徴を手がかりとして—

金英周・五十嵐陽介・酒井弘

韓国語/朝鮮語には、意味上の主語が属格で標示される連体節（属格主語節）が存在するが、属格名詞句が連体節の統語上の主語であるか否かについては意見が分かれている (Sohn, 2004)。本研究では、ソウル方言において、枝分かれ構造の相違によって発話された文中のピッチ (F0) パターンの分布が異なる (Schafer 他, 2002) ことに着目し、韻律的特徴を手がかりに属格主語節の統語構造を探った。主格主語連体節（左枝分かれ構造）、属格主語節、属格名詞と形容詞による名詞修飾（右枝分かれ構造）の3パターンの刺激を作成し、ソウル方言話者20名の音声を録音して、音声分析ソフトを用いてピッチパターンを抽出した。分散分析の結果、左枝分かれ構造と属格主語節の間には有意差が見られなかったが、属格主語節と右枝分かれ構造の間には有意差が見られた。この結果は、属格名詞句が連体節の統語上の主語であることを示している。

Predicate Phrase と日本語助詞の「に」

辰己雄太

Sadakane and Koizumi (1995) は日本語の助詞「に」を (i) 格助詞, (ii) 後置詞, (iii) *ni of ni insertion*, (iv) *a form of the copula* の四つに分類している。しかしこの論文は主に (i) と (ii) に属する「に」について分析したものであり、(iv) に属する「に」については詳細な分析が行われていない。そこで本研究ではこの (iv) のクラスに属する「に」について分析し、この「に」は日本語の繫辞「である」に現れる「で」と同様に、Predicate Phrase の主要部であると主張する。また、(iv) に属する「に」と繫辞の「で」はかき混ぜ操作に関して異なるふるまいを示すことがあるが、この点についてはそれぞれの助詞が現れる統語環境と適正束縛条件によって説明が可能であり、本研究の主張の反例にはならないと結論づける。

父称 Mac-/Mc-で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造

大滝靖司

日本語における借用語に見られる促音化のうち、原語の語中子音に起こるものを「語中の促音化」(例: happy ⇒ ハッピー)と呼ぶ。その生起要因について「原語の先行母音の強勢」や「原語の重子音つづり字 (pp, tt, ck...)」などが指摘されてきたが、多くの語が両者を持ち合わせており、要因の特定は難しい。本研究では「先行母音の強勢」という要素を排除して「重子音つづり字」の影響を検証するため、ほとんどの場合に後続母音に強勢がある父称 Mac-/Mc-で始まる姓の借用語 (例: McDonald ⇒ マクドナルド) を複数の電子辞書とウェブ辞書から計 257 語抽出し、原語のつづり字や音節構造の違いによる父称の促音化率を計算した。その分析結果から「語中の促音化」は、①原語の重子音つづり字が生起要因として大きな役割を果たしている点、②子音が後続する場合よりも母音間子音の方が生起しやすい点を主張する。

町名のアクセント：アクセントの平板化と言語内の要因

儀利古幹雄

後部要素が「町 (ちょう)」である複合名詞 (以下、町名) のアクセントには、前部要素の最終音節にアクセントが付与される型と平板型との2つがある (例: すえひろちょう (末広町); いずみちょう⁰ (泉町) (下線はアクセントを、[⁰]は平板型を示す))。本研究の目的は、東京方言話者に対する発話調査を実施し、町名におけるそれぞれのアクセントの生起要因を明らかにするとともに、町名のアクセントの生起傾向には世代差が観察されることを示すことである。調査の結果、後部要素によって一義的にアクセントが決定される従来の複合名詞とは異なり、町名のアクセントは前部要素のモーラ長や音節構造に影響を受けて決定されることが明らかになった。また、若年層の方が町名を平板型アクセントで発音する傾向が強いことも明らかになったが、どのような町名でも一律に平板化が進行するわけではなく、そこには言語構造的要因の干渉が強く観察される。

Japanese accent is largely predictable: Evidence from given names

Ayaka Sugawara

This talk points out an accentual discrepancy between Japanese given names and common nouns, and proposes an OT analysis. The analysis incorporates these observations: (i) some onomastic suffixes have a deaccenting effect, (ii) voicing has an effect on vowel duration: the vowel is longer before [+voice] than before [-voice]; this has accentual consequences in *Koo-taroo* vs. *Kóo-jiroo*, and (iii) longer names are analyzed as compounds and follow the compound noun rule. Our analysis covers 91% of the names in our database. While the analysis builds on previous research on Japanese accent (McCawley (1968), Haraguchi (1991), Kubozono (1993), a.o.), we document new

factors in its placement and confirm recent research (Kubozono (2008), Ito&Mester (2011)) that emphasizes its predictability.

Kyungsang Korean Accent Classes and Lexical Drift

Michael Kenstowicz

This paper reports the results of a survey of five South Kyungsang (Pusan) speakers concerning the regularity of the Middle Korean-SK accentual correspondences in a corpus of c. 1,900 native (non-Sino) nouns. Our study reveals three major trends. First, larger accent classes tend to attract items from smaller classes. Second, words with higher token frequency are more likely to develop regularly from MK compared to lower token frequency words. Third, particular segmental and syllable structures tend to bias words to certain accent classes. We suggest that these differences reflect the native speaker's implicit knowledge of the statistics of the lexicon, which is also revealed in novel word experiments and loanword adaptations.

ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における前気音の音韻論:
無声閉鎖音の解釈と関連づけて

三村竜之

ノルウェー南西部で話される Sandnes 方言には前気音と呼ばれる現象がある。これまで僅かに調査報告があるものの、単一の形態素からなる固有語に考察の範囲が限定されており、また音韻論的な位置付けが不明であるなど問題点が残る。

そこで本発表では、まず第一に、外来語や複合語、活用形や曲用形など調査の範囲を広げ、音韻論と形態論の両面から前気音の生起条件について詳細な記述を行う。続いて発表者は、/p, t, k/ の音声特性と /b, d, g/ との対立の「最適化」という観点から、前気音を /p, t, k/ によって引き起こされた母音の無声化として解釈する。論拠としては次の二点: 1) /p, t, k/ はその他の無声子音と比べて先行(あるいは後続)する有声子音の無声化の度合いが著しく、「無声化を引き起こす力」が強い; 2) /b, d, g/ は特に音節末の位置では部分的に無声化し /p, t, k/ との混同が予想されるが、前気音により閉鎖音の系列が効率よく区別される。

宮古における「中舌母音」の音韻解釈

青井隼人

かりまた (2002) が指摘しているように、「中舌母音」の解釈は従来の宮古音韻論における主要なトピックのひとつとなってきた。その中心的な問いは「この音素が母音であるか子音であるか」である。

多良間方言において、当該音素は、音素配列の点からも形態音韻規則の点からも明らか

に母音としてふるまう（青井 2012）。一方、伊良部方言などにおいては、同音素が子音的なふるまいを見せる（Shimoji 2007 など）。本研究では、先行研究で記述されている「中舌母音」の音韻的ふるまいを整理し、方言間で異なるふるまいがどのようにして生じたかを考察する。

歴史的に母音 *i に遡る「中舌母音」がいくつかの方言において子音的なふるまいをするに至った背景には、(1) 子音で終わる語の存在と (2) 「中舌母音」に後続する半母音の音変化 (i. e. *j, *w → ž / ĭ; e. g. *iwo > ĭwu > řžu [žžu]) があつたと考えられる。

チノ語補遠方言の介音の推移とその周辺

林範彦

本発表ではチノ語補遠方言[チベット・ビルマ諸語ロロ・ビルマ語支、中国雲南省、以下 BJ と略す]の介音の歴史的推移を記述し、方言分岐との関係性などを検討する。歴史的にはロロ・ビルマ祖語における頭子音 *P-, *M- *K- (P は両唇閉鎖音、M は両唇鼻音、K は軟口蓋閉鎖音を示す) に対して、*-l-, *-r-, *-y- の 3 種の介音と結合していたと考えられる。介音の BJ における推移としては基本的に *Pl-/ *Pr-/ *Py- > BJ. Pj-, *Ml-/ *Mr-/ *My- > BJ. Mj-, *Kl-/ *Kr-/ *Ky- > BJ. K-/ TS- (TS は破擦音を示す) のように記述できる。

BJ は多くの同系諸語同様、介音が歴史的に -j- に合流している。方言関係にあり、介音として -r-, -j- の 2 種類をもつチノ語悠楽方言[以下 YJ と略す]に比べてチノ語の方言分岐や変化の過程を解明するには BJ は不利に見える。しかし詳細に検討すると、YJ: BJ= -u: -a という母音の対応関係や破擦音化の状況から、チノ祖語(Proto-Jino)において *Ku>*Kju の変化が独自に生じ、BJ では YJ と分化する以前に介音が挿入されたと分析できる。

Non-reconstruction in Chinese sluicing

Ting-Chi Wei

This paper argues that the reconstruction of deleted IP in Chinese sluicing cannot explain quantificational mismatches regarding number, scope and adverbs. In Chinese sluicing, the number that the antecedent denotes fails to parallel the number that the corresponding *wh*-remnant denotes, violating parallelism. Further, *wh*-remnant cannot refer to the “implicit” indefinite antecedent which manifests narrower scope than any other operator in the clauses (Romero 1998). But this scopal restriction does not occur in Chinese. Moreover, the ‘mention-all’ adverb seems to be degraded in sluicing, whereas this degradation does not happen in pseudosluicing in English (Merchant 2001) and Chinese. With these, we propose that sluicing in Chinese is a non-IP-reconstructed pseudosluicing, which sluice simply consists of subject *pro*, copula *shi*, and *wh*-remnant.

カドゥー語とガナン語における疑問助詞について

藤原敬介

カドゥー語とガナン語は、いずれもチベット・ビルマ語派・ルイ語群の言語であり、ビルマ・ザガイン管区・バマウツ地方でカドゥー人とガナン人によってはなされている。両言語は、語彙の類似率が九割をこえるという報告もあるほどに、よく似た言語である。しかし両言語の文法は、機能語を中心に相違がある。

本発表では両言語の疑問文において文末にあらわれる疑問助詞を分類し、生起条件を分析した。その結果、概略としては以下の点がわかった。(1)カドゥー語の疑問文では、(A)名詞述語文であるか動詞述語文であるかによって疑問助詞がことなり、(B)真偽疑問文のみ、あるいは疑問語疑問文でのみあらわれる疑問助詞は周延的である。(2)ガナン語の疑問文では、(A)真偽疑問文であるか疑問語疑問文であるかによって疑問助詞がことなり、(B)疑問語疑問文のなかでのみ、名詞述語文であるか動詞述語文であるかによって、疑問助詞がことなる。

アラビア語チュニス方言における文構造の働き

熊切拓

アラビア語チュニス方言の推量を表す語 *baalik* 《多分》に関しては、トルコ語からの借用とする説（トルコ語 *belki* 《多分》）と、固有語に由来するとする説（*baal* 《心》＋2人称単数接辞）の2種がある。本発表では、この語の統語的特徴を記述し、この2説だけでは説明できない諸現象があることをまず指摘する。そして、こうした現象の背景には、次の2つの要因が働いているということを主張した。

1) この言語においては文構造上、モダリティ辞が文の主要素として人称辞（もしくは人称要素）を伴って現れるが、推量を表すこの *baalik* もまたそのようなモダリティ要素（モダリティ辞＋*-ik* [2人称単数接辞]）として解釈されるようになった。

2) 文脈に関係なく *-ik*（2人称単数接辞）が現れる（つまり1人称や3人称で現れることがない）のは、2人称を含む動詞句が文法化する現象と関係がある。

サハ語の使役文・受身文における格標示と有生性

江畑冬生

本発表ではサハ語の使役文・受身文を単に項の増減操作として記述するのではなく、格標示と有生性に注目しながら、それらと文の意味との関連を論じる。他動詞からの使役文では、単なる他動詞文には決して現れない二重対格が許されることもある一方、対格目的

語が現れないため元の他動詞文よりむしろ項の数が減ることもある。本発表ではサハ語の使役文について、格標示の違いが使役の強制性や使役者の意図性を反映すること、動作主が主語ではなくなるという共通性を持つこと、使役者は専ら人間であることの3点を指摘する。サハ語の受身文の特徴は、特定の人物が動作主として現れることが無い点、非人称受動文（能動文の主語が降格するが主語への昇格は起こらない）が可能である点である。非人称受動文における想定される動作主は常に意志的人間である必要があり、自動詞からの受動文の形成可能性は Shibatani (1998) が主張する階層上に位置づけることが可能である。

ウズベク語のいわゆる suspended affixation について

吉村大樹

Good and Yu (2005) は等位接続構造において最終等位項にのみ語尾が付着する現象 (suspended affixation, SA) について、2種の異なる人称語尾系列のうち一方に属する接語人称語尾だけが統語的に独立しており、SA の読みが可能であると論じた。しかしこの説明では、トルコ語やウズベク語において格語尾や複数形語尾、一部の人称語尾でも SA が見られることを説明できない。そこで本発表では、SA を許容する語尾がどれほど屈折接辞としての特徴を多く有していても他の要素と何らかの統語的關係を有する程度に統語的独立性があり、典型的と思われるものから周辺のなものまで、各種の形式が語から屈折接辞までの中に連続的に分布していると主張する。問題となる語尾は多くの点で屈折接辞に近い接語であるか、または SA を許すという意味では周辺の統語的に独立した要素であると帰結される。これにより SA が成立する上で問題となる語尾の形態・統語的特徴も含めた SA の成立条件が正しく予測できる。

マルト語の副動詞における冗長な活用の発生

小林正人

マルト語（インド、ドラヴィダ語族）の副動詞には、主語と性・数・人称で一致して活用する -ke 形と、不変化の -ko 形がある。用法の違いを考察した結果、活用する -ke 形が副動詞節と主節の主語が同じ場合に用いられる一方、活用しない -ko 形は副動詞節と主節の主語が異なるときに用いられることが分かった。スイッチ・レファレンス接辞の一種だが、同様の接辞の対をもつコリマ・ユカギール語とは逆に、主節と主語が同じ場合に副動詞が一致を示す。

弁別機能をもたない -ke 形の活用はマルト語内部の改新である。マルト語話者はサンタル語と二言語併用しているが、サンタル語においては動詞の一つ前の語に主語の性・数・人称が後倚辞付加され、マルト語の -ke 副動詞の活用と類似している。不変化副動詞と併存して、活用する -ke 形がサンタル語との中間言語の干渉で発達したという仮説を提案し、サンタル語の影響の強いボロパハール方言で非弁別的活用が顕著であることを示す。

古典ナワトル語の被動者名詞形成における項の飽和

佐々木充文

複統合的 (polysynthetic) とされる言語の多くは、動詞の価数や項構造に関して厳格であり、さまざまな面で項や項構造の明示を要求する。Stiebels (1999) は、複統合的言語であるメソアメリカの古典ナワトル語 (Classical Nahuatl) において、動詞から派生した名詞が元の動詞と同様の項構造をもち、それが名詞の語形に反映すると主張した。本発表では、古典ナワトル語の被動者名詞の派生パターンを概観し、(i) 被動者名詞形成は入力として二項動詞のみを許容するプロセスであり、(ii) 元の動詞が三項動詞の場合には目的語接辞によって項が飽和され二項動詞化された上で被動者名詞化されていると分析する。このことから、Stiebels (1999) の主張を支持する証拠は薄弱であるものの、被動者名詞の形成プロセスには動詞の項構造に厳格なこの言語の特性が反映していると主張する。

バスク語レクンベリ方言における能格と同様の機能を持つ絶対格

石塚政行

バスク語では一般に他動詞の動作主項 (A) および非能格自動詞の唯一項 (Sa) は、(e)k という形式で義務的に標示され、能格を持っているとされる。しかし、フランス・レクンベリで話されている方言ではこの標示が義務的ではなく、無標識の名詞句 (絶対格と同じ形式) で A/Sa を表せる。ただし、A や Sa が (1) 焦点になっている場合 (2) 他の A/Sa と対比されている場合には必ず (e)k によって標示されなければならない。この制約は、(e)k による標示が義務的でなくなるという変化がこれらの場合に適用されなかったために生じたと考えられる。「複数の表現が同時に使われる頻度が高いほど、それらは一つの構文として自律したものになる」という見方をとると、(1) や (2) の場合に A/Sa が省略されることはないので、A/Sa に付属していた (e)k は焦点・対比の構文の一部として自律的になり、保存されたといえる。

ハワイ語における特殊動詞 - "Loa 'a-type verbs" を巡って-

岩崎加奈絵

ポリネシア祖語が能格性を有していたといわれるのに対し、東部ポリネシア諸言語は能格的特徴を示すことは稀とされる。ハワイ語も一般に対格言語とされるが、項の取り方の特殊な動詞群が存在している。他動詞では行為者 (A) が自動詞主語と同じマーカ、行為の対象 (P) が別種のマーカをとるのに対し、問題の "loa 'a-type" 動詞では P が主語のマーカをとり A がいわゆる「目的語」のマーカを取る。本発表ではこれを起点に、ハワイ語動詞の記述について考察する。その際言語状況に鑑み、ハワイ語・言語学『研究者』

ではない一般学習者の理解しやすさと、言語事実にのみ厳密に立脚する記述法とのバランスを重要視した。結論は以下の通り。

- 1) locative-type 動詞は能格的であるが、それを記述したうえで共時的には「対格言語」と呼ぶのが妥当である。
- 2) 先行研究で stative とされてきたが必ずしも状態を示すものでない。

混乱を防ぐためカテゴリ階層を上げ、状態動詞の下から明確に外すべきである。

日本語と中国語の「能力主体指向の可能表現」 — 「ニ」標示可能文と“会”可能文—

大江元貴

主体を「ニハ/ニ」で標示する日本語の可能文 (e. g. 彼には英語が話せる) と中国語の“会”を用いた可能文 (e. g. 他会说英语) には、(1) 時空間の限定を表す表現と共起しにくい、(2) 動作様態を表す副詞的成分と共起しにくい、という現象が見られることが日中のそれぞれの研究において個別に指摘されてきた。本発表では上記の現象に加え、(3) 主語に有生性の制約が働くという現象も共通して観察されることを指摘する。その上で、可能表現の主体は行為主体と能力主体という2つの側面を持つが、「ニ」標示可能文と“会”可能文は可能を行為主体の行為との関係で捉えるのではなく、能力主体の性質との関係で捉える「能力主体指向の可能表現」という1つの類型的意味を表す表現であることを主張する。さらに、副詞的成分との共起可能性の違いから、日本語よりも中国語の方が行為の焦点化に対する制限が強いことを指摘する。

V スギル構文の解釈と構造

東寺祐亮

V スギル構文は、形態的な観点から見るとスギルが合成される相手は動詞であるように見えるにもかかわらず、V の度合いが過剰であるという解釈を持つだけでなく V 以外の要素の度合いが過剰の解釈になることもある。ということは、いずれかの段階で、そのような意味解釈を構成的に決定する表示が生成されているはずである。その表示がどのようなか、そして、それがどのようにして派生されるかを明らかにする。従来の研究では、由本 (2005) のように、スギルが統率する範囲から「度合いを持つ要素」を選択することで、過剰の解釈を作るという分析が考えられてきた。しかし、統語的に「度合いを持つ要素」が選択されるとする分析では、説明できない現象が多々あることを示す。そして、本発表では、統語的に「対象」が選択され、その度合いとなる観点が語用論的に決定されると考えると、それらの現象も含め、この構文がうまく説明できることを示す。

日本語等位接続表現の語用論的分析—タリとシの場合—

長辻幸

日本語の接続助詞タリとシは、それぞれ「Pタリ、Qタリ」「Pシ、Q」という形で動詞句や節を並列的に並べることができ、等位接続構造を構成する。従来、両接続表現の相違点は事態の並べ方（森山 1995）や並列される事態そのものの特徴（中俣 2009）に着目することで記述されてきたが、これらの先行研究ではタリとシの交替における容認可能性に対して十分な説明を与えることができない。そこで、本発表では、関連性理論（Sperber & Wilson 1986/1995²）の枠組みにおける「手続き的コード化」の観点から、タリとシのそれぞれにコード化される情報を考察し、両者が（i）連結されるP、Qのステータスと、（ii）発話理解において等位接続構造が貢献する効果という二点で異なることを主張する。そして、本発表で提示する手続き的情報により、タリとシの交替における容認可能性が適切に説明されることを示す。

「AをBにする」構文の分析：語彙概念構造からのアプローチ

山田昌史

本研究は、これまで従属節に生じる形式として議論されてきた「AをBに（する）」の形式（cf. 村木（1983）、寺村（1983）など）が主文に生じる構文（これを本研究では「AをBにする」構文と呼ぶ）について、その統語的特徴と語彙意味的特徴を明らかにし、その派生メカニズムについて語彙概念構造の観点から理論的分析を与えるものである。この構文は、（1）ヲ格名詞句とニ格名詞句の交替を許さない、（2）ヲ格名詞句のみ統語的操作の対象となる、（3）動作主の主体的動作を表す「する」が生じているにもかかわらず被動作主体の状態変化を表すといった特徴を持つ。本研究は、影山（2004）が提案する軽動詞「する」のLCSと「意味編入」のメカニズムを援用して「AをBにする」構文の派生メカニズムを語彙概念構造の観点から提案し、上記（1）～（3）の特徴が理論的に捉えられることを主張する。

後置文の情報構造と統語特徴

綿貫啓子

本稿では、まず、後置文を情報構造の観点から分析し、後置される要素が、文脈から解釈可能なもの（context-construable = CC）と解釈不可能なもの（not context-construable = not-CC）の2種類に区別でき、CCは「聞き手のために敢えて発話される情報」、一方、not-CCは「話し手の重要度についての判断に基づいて発話される情報」として記述できることを論じる。次に、CCとnot-CCは異なる統語特徴を示すことから、後置される要素の構造上

の位置は少なくとも2種類考えられると主張する。具体的には、TP要素に分類可能な格助詞「が」「を」「に」がCCおよびnot-CCのいずれにも現れるのに対し、CP要素に分類可能な主題(トピック)の「は」、対照の「は」、総記的「が」はCCには現れるがnot-CCには現れないことから、CCは主題(topic)あるいは対照焦点(contrastive focus)要素として命題TPの外側のCP内(Top(ic)P、F(ocus)P)に位置し、一方、not-CCは命題TP内に位置すると論じる。

現代日本語標準語における未然形

佐々木冠

現代日本語標準語において未然形を用いるか否かが問題になる動詞の形態法は、否定形の形成と態の派生である。

本発表では、否定形におけるラ行五段化と使役におけるサ入れ現象の分析を通して、未然形分析と非未然形分析の妥当性を検証する。否定形に関しては東日本の方言でラ行五段化が生じないことを予測できる未然形分析が妥当である。使役の派生に関してはサ変動詞のサ入れ形を予測できる点で非未然形分析の妥当性が高い。

命題選択プロセスの存在を明示する「の(だ)」文

五十嵐啓太

「の(だ)」文は、因果関係に注目した場合、(1)のように先行文に対し、結果を表すことがある(cf. 奥田(1990))。なお、以下の例はいずれも独話のものとする。

(1) 戦争が始まった。世界は滅びてしまうんだ。

「戦争が始まれば、世界が滅びる」という因果関係から、先行文「戦争が始まった」が原因を、「の(だ)」文の表す命題「世界が滅びてしまう」が結果を表している。一方、(1)と同じように結果を表していても、(2)の「の(だ)」文は容認されない。

(2) ヒーターをつけた。*すぐに暖かくなるんだ。

「ヒーターをつければ、暖かくなる」という因果関係から、「の(だ)」文の命題「すぐに暖かくなる」は結果を表している。本発表では(1)と(2)の容認性の差を説明するために、「の(だ)」文は「ある命題が複数の命題の中から選択されたことをマークする言語手段である」と主張する。

認識論における「のだ」

蒲地賢一郎

1. 雨が降った。2. 雨が降ったんだ。3. きっと雨が降ったんだ。4. ?きっと雨が降った。
前出の例文 1. は話し手が降雨を断定し、一方 2. は推測しているような場合に用いられ得る。「んだ」が「んだろう」の短縮形であると想定する。すると、2. は文頭に「きっと」が現れても 3. のようにほぼ同じ意味を表わす。しかし 3. において「んだ」を取り除くと、4. に見られるように容認性に関していくらかすわりの悪い文になる。なぜであろうか。「降った」というのは断定、「きっと」は推論的表現とするなら、同一文内で、両者が同時に存在するのは矛盾ではないのか。対照的に 3. においては、「きっと」と「んだ」という推論的表現が矛盾なく存在する。しかし、一つ別の疑問点が生じてくる。容認可能な 2. において、「降った」という断定と「んだ」という推論的表現が同時に存在するということだ。

複合動詞形成における「一義的経路制約」の再解釈 - 「*落とし壊す」「*潰し壊す」はなぜ不適切なのか -

張楠

本稿では、日本語の複合動詞形成における「一義的経路制約」(Goldberg1991)について再解釈し、また複合動詞の前項要素に注目し、同じ状態変化を表す「切る」クラスと「潰す」クラスの違いを明らかにする。①複合動詞形成は一義的経路制約に従い、複合動詞全体は後項動詞が供給する単一経路しか持たない、②「切る」クラスと「潰す」クラスとは、主体の動きと客体の変化の関わり方が異なっており、「切る」は複合動詞の前項要素とする場合、その結果性が意図性によって後退され、主体の動きのみを表すこととなる。それに対して、「潰す」は複合動詞の前項とならない。以上の主張は、複合動詞形成における<行為→変化→結果>という行為連鎖にも、「過程結果構造」という《アスペクト・ヴォイス》モデルにも整合する。さらに、複合動詞の持つ単一変化経路が後項動詞によって供給されることは、複合動詞の右側主要部説にも支持できると考えられる。

日本語における「擬態語+つく」タイプの動詞の形成について

長谷部郁子

本発表で扱うのは「イラつく」などの「擬態語+つく」タイプの動詞である。本発表では、これらのタイプの動詞は、擬態語の語彙概念構造(LCS)におけるMOVEやBECOMEといった下位事象のみを「つく」が取り立てることにより形成されると主張する。そして、「*イソつく(イソイソする)」や「*ワクつく(ワクワクする)」のような動詞化が許されないのは、基体となる擬態語のLCSがこうした下位事象を含んでいない、または余分な上位事象を含んでいるため「つく」による下位事象のみの取り立てが不可能であるため動詞化が

許されないと議論する。さらに、「ワンワン」のような擬音語は「*ワンつく」のような動詞化が許されないが、これは、擬音語は擬態語と異なり LCS を持たず、クオリア構造表記のみを持つために「つく」による LCS の取り立てが不可能であるためであると論じる。最後に、他の動詞化接辞「まる」や「む」についても触れ、各接辞の機能の相違を明らかにする。

移動様態動詞と生起する着点二格名詞句とその認可条件

並木翔太郎

「走る」や「歩く」といった移動様態動詞は、移動の着点を表す二格名詞句と共起できないと分析されてきた（例：*太郎は駅に歩いた）。しかし、使役移動構文（「太郎を駅に走らせた」）や間接受身構文（「2 塁に走られた」）では移動様態動詞と着点二格名詞句との共起が観察されている。本発表では、当該表現が容認可能となる条件を意味論的観点から明らかにする。具体的には、①着点二格と共起可能な移動様態動詞は経路を指向する動詞に限られること、②また使役移動構文では「被使役者への強制」という構文的意味が、間接受身構文では「被害性」という語用論的意味がそれぞれ位置変化を話者に想定させるため着点二格の共起が容認されること、の 2 点を主張する。さらに、本発表の主張は、語りの文体で容認可能となる移動様態動詞と着点二格の共起も説明も可能とすることも示す。これらの表現は全て、位置変化の背景化と様態の前景化という観点で共通している。

ネオ敬語「ス」の語用論的機能

呉泰均

本発表の目的は、丁寧語形式「デス」の変形と見られる「ス」を取り上げ、「デス」の機能を継承した敬語的待遇の意味を持つ有標形式と見て、具体的な場面での語用論的機能上、常体と敬体の中間話体という意味でのネオ敬語と位置づけることである。社会的言語運用能力の発達（wording）の観点からすると、常体と敬体の運用能力があるのなら、「デス」が使えない理由で「ス」を使用しているのではなく、意図的に「ス」を選択しているという言語的調整が現れる重要な問題である。従来の研究では、なぜ「ス」を使用するかという使用動機と選択動機について指摘されていないため、本発表では、「ス」を「丁寧さの連続的尺度における待遇レベルの動的調整」「ポライトネスをコントロールする言語的ふるまい」を指向する中間話体、つまり、ネオ敬語として位置づけたい。

《ポスター発表 Poster presentations》

日本語とアイヌ語の受動構文をめぐって
—不定人称構文についての考察—

FREGUJA Fulvio

本稿では、概念的側面に目を向け日本語とアイヌ語の受動構文について述べる。世界の言語における受動構文の形態・統語論的な現れ方の多様の故、対照研究を行うのは非常に困難である。日本語とアイヌ語もその好例である。日本語とアイヌ語の受動構文の間の形態・統語論的相違の為、十分な対照研究は殆ど皆無であった。形態・統語論的な多様は、ただ言語の表面的な特性にすぎず、真の普遍性は概念的なレベルにあると考える。ここでは先ず、日本語の「ラレル文」とアイヌ語の「a-, -an」の多義にある類似点について論じたい。表現形式の背後に「行為者の背景化」の度合いに基づく共通の連続体が隠れており、その中で、日本語の受動的可能表現とアイヌ語の不定人称他動詞構文を取り上げる。本稿では、これらの構文を「不定価値受動構文」と称し類型化する。不定価値受動構文は、ある対象に対する抽象的な価値付与を表す。更に行為者は不定であり省略される事が多い。

早期英語教育および英語圏生活経験の効果の検証
—日本人大学生による英語の対立音素の聴覚認知—

宮本彩加・小林由紀・広瀬友紀

本研究は、早期英語学習経験および幼児期の英語圏生活経験が成人後の英語聞き分け能力に与える影響を検証した。/ba-/ /fa/・ /sa-/ /θ a/・ /la-/ /ra/の3つの英語対立音素を対象に、ABX 課題による弁別実験と、ミスマッチ陰性電位 (MMN) を指標とした脳波計測実験の二種類の実験を行った。中学入学前の英語学習経験に基づき、帰国子女群・早期学習経験あり群・早期学習経験なし群の3グループを設定した。弁別実験では、/sa-/ /θ a/と /la-/ /ra/の聞き分けの正答率について、帰国子女群が他の二群よりも有意に高いスコアを示した。脳波実験では被験者群間に差は見られず、被験者全体の傾向として /la-/ /ra/ に対し MMN の惹起が認められた。よって、日本人英語学習者は中学入学前の英語習得開始機会や早期学習経験の有無に関わらず、脳内では /l/ と /r/ の違いを検出している可能性が示唆された。

語彙的複合動詞における使役起動交替

日高俊夫

影山 (1993), 松本 (1998), 由本 (2005) 等でも言及され、須賀 (1983), 西尾 (1988) 等の記述的研究はあるものの、理論的にはあまり詳しく論じられていない(最近, 陳 (2010)

や小川・新沼（2010）等の分析が出てきている）「語彙的複合動詞」（以下LVC）の自他交替現象のうち、いわゆる「使役起動交替」に焦点を当て、「他動詞の自動詞化」の観点から議論する。具体的には、影山（1999）、浅尾（2007）、陳（2010）、日高（2010）のようなLCS合成によるLVCの形成を仮定し、Levin and Rappaport Hovav（1995）の考え方を形式化したKudo（2010）の事象の主辞性の考え方に基づいて、当該現象は単純動詞の使役起動交替と同様に分析できることを示す。また、本発表の語形成メカニズムを想定することにより、接頭辞付加によって形成される英語における派生動詞の使役起動交替との共通性についても、由本（2005）の分析に沿う一般化が得られることを示唆する。

ビジネス接触場面の会話において齟齬が生じたとき
— 会話の「修復」の視点から —

梅村弥生

本発表は、在中国日系企業内における日本人社員と中国人社員との仕事での日本語会話において、両者の間に生じる、発話・聞き取り・理解のトラブルに焦点をあてた分析である。特に、会話参加者の一方がトラブルを認識したにも関わらず、「修復」そのものがスムーズに行われない場合を「齟齬」とし、「齟齬」克服のプロセスを会話分析的な手法を使って明らかにする。「齟齬」は、幾つかのターンを経てから「修復」の完了によって解消される場合もあれば、放置され、理解構築に達しないまま会話が終了する場合もある。分析にあたっては、母語話者・非母語話者、或いは社会文化的なアイデンティティを参加者に固定的に付与することなく、あくまで会話当事者が、自らの仕事や言語の知識を資源としながら、理解達成を志向するという視点を保持する。この分析から、参加者双方の共同の相互行為なくしては、理解構築の達成は困難であることを示唆する。

《ワークショップ1 Workshop 1》

アクセント位置と音調素性

企画者・司会：那須川訓也

本ワークショップでは、音調現象分析において重要な役割を担うアクセントの担い手となる(i)韻律構造上の範疇と、音調曲線の音声的表出にかかわる(ii)音調素性について、普遍文法的仕組みのもと、簡潔でかつ統合的な記述を新たに提案する。先行研究の多くでは、(i)を音節もしくはモーラとし、(ii)についてはHとLという2つ(理論によっては3つ以上)の単位を用いて記述がおこなわれてきた。しかし、本ワークショップでは、音韻現象の普遍的記述および記述的過剰生成の制限という観点から、それらに代わる新たな単位の提案を行う。(i)については、音節のみを、そして(ii)については、音調にかかわる素性ひとつのみ用いて、音調体系の記述を試みる。この分析を援用することで、日本語や韓国語方言の呈するピッチアクセント型は従来論じられてきたような有標な体系ではないことを主張

する。

アクセントの担い手となる単位

早田輝洋

アクセントの担い手は一般に、音節・モーラ・成節的分節音等と言われ、実際そのようなものとして多くの言語・方言がうまく記述されている。

ただ、筆者の手がけた韓国語方言（朝鮮語慶尚道諸方言の典型的なもの、おそらく15世紀の朝鮮語）は、 n 音節語に $n + 2$ とおりの型が認められる——'植木算的に'音節数 + 1個である音節境界を可能なアクセントの担い手とし、他に「無アクセント型」一個、計 $n + 2$ の型を持つ。このような植木算的な音節境界をアクセントの担い手として記述することにより、1) 均整のとれたアクセント型、2) 動詞活用におけるアクセント型の交替、3) 複合語アクセント、4) 名詞のアクセント上の最小対、等において、今の筆者の試みの範囲では当該方言のもっとも簡潔な記述・説明が得られる。

日本語における音調素性

那須川訓也・Phillip Backley

先行研究 (Haraguchi 1990, 他) において、音調曲線にかかわる範疇として H と L という 2 種類 (理論によっては 3 つ以上) の単位が用いられてきた。理論上これらの単位は、音調現象上、等価な働きを呈することが予測されるが、実際には、H と L のどちらか一方の単位が動的振舞いを示す。先行研究ではこの音韻過程上の非対称性を、外的規則や制約を用いることなく、表示上の確に捉えることが難しい。そこで、本発表では、音配列論および素性特性の観点から、一言語内で H と L の両方が同時に用いられることはないことを論じる。事例として、日本語に焦点を当て、そのピッチアクセント型分析に従来用いられてきた H を排し、L のみで音調現象を記述することの妥当性を論じる。

日本語における複合語と句のアクセント

時崎久夫

日本語では、(複合)語のアクセントはピッチの高から低への下降(下がり核)で表され、句のアクセントはダウンステップのない高いピッチで表されるとするのが一般的な考え方である。しかし、この定義では、複合語でアクセントが、形態統語的な主要部である右要素に置かれることになり、ストレスなどの広い意味でのアクセントが補部にいくという普遍的な法則の例外となってしまう (Nespor and Vogel 1986, 窪菌 1996)。そして、句でも補部に卓立が置かれるという範疇を超えた普遍性 (Cinque 1993) については、日本語でもいわゆるアクセント語からなる句では、補部の卓立は主要部のピッチがダウンステップす

ることにより具現し、例外とならないという事実と合致しない。

本研究では、日本語の語頭が強位置であるとする考え (Nasukawa and Oishi 2001) に基づき、日本語の複合語では、左要素の語頭に第 1 アクセントが強さとして現れ、右要素の最初にピッチの高低の下降が随意的に第 2 アクセントであらわれるということを述べる。よって、日本語も、複合語と句ともに補部にアクセントがあるという普遍性の例外ではないことになる。日本語が語頭アクセントを持つことについては、アルタイ語族を中心とするアジア諸語との類似性から裏付けたい。

《ワークショップ 2 Workshop 2》

東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に

企画者：長崎 郁
司会者：江畑 冬生

アルタイ型諸言語の文法記述では、動詞屈折形式に定動詞、副動詞、分詞（記述によっては、形動詞／動詞的名詞，動作名詞，不定形などと呼ばれる）の 3 つを設定することが多い。このうち分詞は、典型的には連体節述語として用いられ、主節述語機能をもつ定動詞、副詞節述語機能をもつ副動詞と機能的な棲み分けをなすように見える。しかし、このような 3 分類、特に分詞については、以下のような観点からさらに検討が必要である。[1] 分詞は名詞節述語、主節述語、副詞節述語の用法を有することもある。[2] 分詞は派生形式との統語的・形態的な区別が難しいことがある。本ワークショップでは、東アジアに分布するサハ語、ブリヤート語、ユカギール語、八重山語波照間方言における動詞屈折形式の概要、分詞の統語的機能の多様性、形態法を具体的に見てゆくことにより、分詞ひいては動詞屈折形式に関する新たな視点を提示することを目指す。

サハ語の動詞屈折形式：形式と機能の対応

江畑冬生

サハ語の動詞屈折形式は、動詞語尾の種類に応じて定動詞・分詞・副動詞の 3 つに分類される。定動詞は主節述語として、分詞は主に名詞節述語・連体節述語として用いられ、副動詞は副詞節述語として用いられるか動詞を修飾する。分詞の中には、名詞節・連体節だけでなく、主節述語用法も持つものもある。以上のような形式と機能の対応関係を踏まえつつ、本発表では分詞をめぐる 2 つの問題を論じる。[1] 動詞からの派生名詞には、項構造を保持する点で動詞の屈折形式の 1 つである分詞と一見似るものがある。しかし、肯否・時制・主語の標示といった文法範疇を標示可能なのは分詞のみである。[2] 定動詞と分詞の動詞語尾部分の音形が類似することがあり、同一の動詞語尾が異なる統語的環境に現れるとする分析も可能である。4 つのケースを検討すると、定動詞と分詞の動詞語尾が類似していても、両者は異なる形式であると解釈する方が合理的である。

ブリヤート語の動詞屈折形式：分詞の機能／派生との区別

山越康裕

ブリヤート語の動詞屈折形式は定動詞・分詞・副動詞の3つの形式に大別される。しかし、形式と機能がきれいに対応しない。とくに分詞は連体節述語・名詞節述語として機能するほか、定動詞のように主節述語として機能することも、また副動詞のように副詞節述語として機能することもある。本発表ではまず動詞の屈折形式を概観したうえで、「分詞と出動名詞との区別」「分詞の副詞節述語用法」を問題点としてとりあげ、以下3点について報告する。[1] 出動名詞にも項構造を保持するものがある。しかし、否定標示が可能なのは分詞のみである。[2] 分詞が多様な機能をもつという特徴は、形容詞の特徴に類似する。[3] 分詞が副詞節述語として機能するには必ず何らかの付属的要素（格接辞／条件接語／所有人称接語）をともっており、これらが副詞節述語を形成するための役割を担っている可能性がある。

コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式：分詞の機能と形態法

長崎郁

コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式は定動詞、副動詞、分詞の3つに大別することができる。定動詞と副動詞の機能は基本的には主節述語、副詞節述語に限られる。分詞として3つの形式が認められるが、これらは連体節述語として用いられるという点で共通するものの、形式によっては主節述語あるいは名詞節述語としても用いられることがある。本発表では、動詞の屈折形式および定動詞と副動詞の用法を概観した上で、分詞の、[1] 統語的機能の多様性、[2] 形式の違いおよび統語的機能の違いによる動詞的・名詞的範疇の標示、[3] 派生形式である結果名詞との違い、について論じ、形式や統語的機能によって形態的に標示しうる範疇に差があること、分詞と派生形式との違いは動詞的範疇をどの程度標示できるかという点にあること、の2点を指摘する。

八重山語波照間方言の動詞屈折形式と述部が要求するモダリティ要素

麻生玲子

琉球諸語八重山語波照間方言の動詞屈折形式は、定動詞、分詞、副動詞の3つに分類することができる。それぞれの動詞屈折形式は、接語を付加しない形式であれば、統語機能とほぼ一致する。すなわち、定動詞は主節述語、分詞は連体節述語、副動詞は副詞節述語として機能する。一方、同じ動詞屈折形式であっても、後続する接語によって機能が様々に変わる。特に分詞は接語によって主節述語および副詞節述語として機能しうる。本発表

では、まず波照間方言の動詞形態法および各動詞屈折形式の単独の形式の機能を概観し、以下の3点について報告する。[1] 統語機能を変える接語が存在する。[2] 主節述語はモダリティ要素を必要とする。[3] 動詞屈折形式よりも、後続する接語が統語機能を決めることが多々あり、きれつづきによる動詞屈折形式による分類の有効性が他の3つの言語よりも低い。

《ワークショップ3 Workshop 3》

コーパス基盤の日本語研究の新地平

企画者：プラシャント・パルデシ
司会：影山太郎

国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)は、オンライン公開(2011年8月)およびDVD版公開(同年12月)により、その全貌を現した。それ以前にも同コーパスの一部は試験的に日本語研究で活用され、多くの研究を生みだしているが、この完成版により、言語学、日本語学、日本語教育、自然言語処理、辞書編集など幅広い分野で本格的な利用が期待される。本ワークショップでは、BCCWJの開発、BCCWJ検索ツール、BCCWJの活用、およびBCCWJを超える超大規模コーパスの将来構想について紹介し、コーパスが日本語の記述的・理論的研究や日本語教育にもたらす可能性を示唆する。ワークショップは以下の3つの研究発表から構成される。これらの発表と聴衆との議論を通じて、コーパス基盤の日本語研究に今後どのような新しい地平が拓かれるかを明らかにする。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の構築とKOTONOHA計画の歩み

前川喜久雄

筆者らは昨年末に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の完全公開を果たした。本稿の前半ではこのコーパスを紹介する。BCCWJはKOTONOHA計画の一環として2006年来構築してきた1億語規模のコーパスであり、大小さまざまなサブコーパスから構成されているが、サブコーパス中のサンプルは明確に規定された母集団から無作為に抽出されている。この点でBCCWJは単にさまざまなジャンルの文章を集めただけの均衡コーパスにとどまらず、統計的代表性をそなえたコーパスとなっている。この種の均衡コーパスは世界的にみてもユニークな存在である。本稿の後半では国立国語研究所のコーパス整備計画であるKOTONOHA計画の現状を紹介する。KOTONOHA計画は2006年に策定されたが、2009年10月に国語研が大学共同利用法人に移管されたため方向修正が必要になった。新しい開発目標として過去の日本語を対象とする歴史コーパスと100億語規模の現代語コーパスを設定して準備研究を進めている。

形態論情報を利用した BCCWJ 検索ツール『中納言』の機能とその日本語研究への活用

山崎誠

本発表では BCCWJ の検索ツールの一つである「中納言」の主な機能を紹介する。「中納言」は、BCCWJ 全体を短単位・長単位・文字列の 3 種類の方法で検索することができるオンライン・コンコーダンサーである。BCCWJ は、短単位・長単位というコーパス用に設計した 2 種類の人工的な言語単位で解析されている。「中納言」では、それらの単位の持つ形態論情報である、語彙素、語彙素読み、品詞、活用形などを指定した検索ができる。また、検索語を含め前後合わせて 10 単位までの共起語検索が可能である。本発表では、これらの機能を通じて「中納言」による BCCWJ の検索が日本語研究にどのように活用できるか具体的な事例を挙げて検討する。

レキシカルプロファイリング手法を用いた BCCWJ 検索ツール NINJAL-LWP とその研究事例

ブラシャント・パルデシ・赤瀬川史朗

国立国語研究所(NINJAL)では、コーパスを活用した日本語研究や日本語基本動詞ハンドブックの作成を進めるために、Lago 言語研究所と共同して、レキシカルプロファイリングという手法を用いた BCCWJ 検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ (略称:NLB)を開発した。本システムの最大の特長は、内容語(名詞、動詞、形容詞、副詞)のコロケーションや文法的振る舞いなどを簡単にしかも瞬時に調査・観察できる点にある。本発表では、コーパス検索ツールとしての NLB の特長や機能を紹介した上で、辞書執筆および日本語研究の事例を報告し、今後の展望および課題を検討する。